

# アトピー性皮膚炎 その二

今回は治療法について考えてみましょう。前回、アトピーはアレルギーだけでなく、皮膚のバリア機能の低下(体質)も強く関係していること、スキンケアが重要で、清潔を心がけ、保湿剤を用いるだけで症状が改善することを説明しました。

一方、アトピーが話題になる理由は、難治性であることです。治らないからこそ、さまざまな治療が提唱されているのです。もちろん、皮膚の病気でですから治療の中心は当然軟膏になります。スキンケアで改善しないような生活に支障がでる痒みやジクジクする場合が治療の開始基準です。用いられる軟膏で有効性と安全性が科学的に立証されているのはステロイド剤です。軟膏療法は皮膚の表面の炎症(湿疹)を押さえる訳ですから、あくまでも対症療法です。そのような理由から軟膏を塗っている間は調子が良く、やめることとどくなるということは仕方ないことなのです。アトピー治療の到達ポイントはどこに置いたらいいのでしょうか。目的は治すということよりも子どもの苦痛を取ってあげることと考えて下さい。

副作用が強調されるあまり、子どもの体が掻き傷だらけで血がにじんでいるもステロイド軟膏を拒否するひともいます。果たして正しいのでしょうか。誰でも眠れないほど痒ければ、翌日は大変です。そんな毎日の繰り返し返しでは、子どもの発達や発育に影響を及ぼすかもしれません。子どもの苦痛を取り除きよりよい生活を提供することは、親の義務であり当然なことでは、かかりつけの先生の考え方や説明をよく理解して、軟膏の種類や塗る場所・回数など、指示を守って使用すれば、十分な効果があり副作用も怖いものではありません。近年、小児でも免疫抑制剤の軟膏の使用が許可され、効果を上げています。さて軟膏療法でコントロール出来ない場合は、内服薬が必要になることもあります。内服薬としては、痒み止めと抗アレルギー剤があります。抗アレルギー剤は長期に使われるもので、時に体質改善の薬と処方されることがあります。しかし、アレルギーの反応を抑える薬であって体質を変えるもの(治す薬)ではないことを知っておいて下さい。

薬剤でコントロールが不十分場合には、食事療法が考慮されます。単品のアレルギーの場合には、除去することはあまり問題ありません。かわりに別のもの、栄養を補えるからです。しかし、多種類のアレルギーの場合には、発育や発達も同時に考えなければなりません。皮膚がきれいになることと栄養とは、どちらが大切か言うまでもありません。お母さんたちに「皮膚と脳のどちらが大切？」と聞くと迷わず「脳」と答えるにもかかわらず、目の前のことだけ見ている親御さんには皮膚の赤さや痒さが強く大きく見えてしまいがちです。今が大切なことはよくわかりますが、将来を見据えた治療はもっと大切なことだとおもいます。悲しいことですが極端な除去食のため、栄養失調や脚気で入院したという話も伝わってきます。

アトピーに関しては渾沌としている状況なので、医師によっても診断や治療法が異なるのが現実です。安心して治療を受けるためにはコミュニケーションがとることも大切です。十分な説明を受けて理解した上で、医師の指導のもとで治療を続けることがとても重要です。患者さんの弱みにつけ込んだ治療法(アトピービジネス)も問題となっているため、良いもの悪いものを見極める目も持つことも必要です。

## Profile

### 川村和久

小児科専門医

【かわむら・かすひさ】仙台市在住  
医療法人社団かわむらこどもクリニック院長。日本一の小児科サイトを運営する、言わずと知れた小児科専門医。「お母さん達の心配・不安の解消」を理念に、日々の診察にあたっては、宮城県小児科医会理事。2001年には医師として大変名譽のある日本小児科学会パネリストとして選ばれる。

【川村先生の取り組みをNHKテレビが放映】

\*3/10 NHK教育「ETVワイド ともに生きる」

医師と患者のコミュニケーション ～心通う医療のために～

\*4/17 NHK総合「生活ほっとモーニング」

<http://www.kodomo-clinic.or.jp/>

